【研究ノート】

小説をとおして「文化大革命」をみる（二）

太田　進

「私はどうすればいいの？」への反響から

前稿において、陳国凱のこの小説が、そのプロットのなかに「文革」の全期間をふくんでおり、年月までも「文革」の経過と符節をあわせているものだから、この小説をとおして、「文革」の過程と事実をみてきた。

さてそれならば、この小説は、歴史的事実としての「文革」の過程をかきこんだということをこえて、「文革」の真実にせまりえているのだろうか。そのことを知るために、この小説への、中国における反響をみていくことにする。

「私はどうすればいいの？」が発表されたのと同じ『作品』誌上に、一九七九年六月号から十月号にかけて、その反響が登載されている。そして十一月号には、作者自身の一文がのって、一応の締めくくりがつけられたかたちになる。

〈作品討論〉（付「編者のことば」）

①「私はどうすればいいの？」およびその他　江励夫

②文芸作品は典型性と真実性を堅持しなければならな

い――「私はどうすればいいの？」についての意見
咏華

（以上　六月号）

〈「四人組」をあばき批判する小説創作についての討論〉

③子君の悲劇の典型意義と真実性――かねて咏華同志と検討する　秦家倫

④このように悲劇をかいてもいいか――「私はどうすればいいの？」を評す　高哲民

⑤創作上の二つの問題――「私はどうすればいいの？」を評す　馮華徳

（以上　七月号）

〈同前〉

⑥「私はどうすればいいの？」等の小説創作問題についての座談紀要　中山大学中国文学科中国現代文学教研室（陳衡整理）

（以上　八月号）

〈同前〉

⑦また文芸作品は典型性と真実性を堅持しなければならないことを談ず――咏華同志と検討する　劉剣星

⑧『作品』に発表された二篇の小説を評す――「私はどうすればいいの？」と「小川のむこう岸で」　楊箭（原載　広東『梅江文芸』一九七九、二）

⑨春にまたもや寒風が　任川

⑩文芸の社会的功用はなおざりにできない――「私はどうすればいいの？」の結末から思いいたったこと　厳承章

（以上　九月号）

〈同前〉

⑩文芸批評はもう棍棒をふりまわすことをゆるさない――「『作品』に発表された二篇の小説を評す」を評す　楊群

⑫楊群へ　梅冰華

⑬〝労働者・農民・兵士を忘れた〟といいうるのか

――文芸書簡　範懐烈

⑭「私はどうすればいいの？」発表以後――投稿来信の摘録

（以上　十月号）

〈散文〉

⑮かれらはこのようにした　陳国凱

（以上　十一月号）

作品についての討論がはじめられるにあたって、編者は、次のような「前言」をつけている。

二月号に陳国凱のこの作品が発表されてから、読者の反応は強烈であった。全国各地から、三百あまりの来信と投稿をうけとっているが、この短篇小説については、論争があり、ことなった評価がある。具体的な作品をとおして、当面の文芸創作上の問題、典型性、真実性、社会主義の時期における悲劇、いかに正確に作品を評価するか等の問題を探究討論する、と。

六カ月にわたって続けられた、討論の実際をみると、編者の意図するところは、なかなかに心憎いものである。賛否両論をならべ掲載し、十月号には、全国各地からの投稿・来信一千余通を、整理摘録して一挙にのせる（⑭）。それは、「大衆が文芸作品のもっとも権威ある評定者である」、という態度をつらぬいて、政策的な圧力に抗しているからである。

そこで、論争・討論をみていくまえに、この作品がどのようなかたちで、大衆にうけとられているかをみておく。

かならずしも日常的に文学作品にしたしんでいるとは思われない大衆――「老労働者は文盲かあるいはわずかしか文字をしらな」かったり、「われわれ田舎のものは、一般に文学に興味を感じていず、ことに農村の中老年の女性はそうである」（ともに⑭）のだが、この「血と涙の物語」には、強烈な反応をしめしている。

⑭のまとめには、そうした事例が、数おおく紹介され

ており、そこには、中国における文学受容の具体的な姿がみてとれる。

『作品』誌が、どれくらいの発行部数をもつのかは、不明であるが、「私はどうすればいいの？」が出てから、この文学雑誌が毎月発表されるたびに、長蛇の列をなす、このようなことは十数年来みられなかったことだ、とか、人民警察が秩序維持にあたらねばならぬ程だ、というような例も、報告されている。陝西の『西安日報』、遼寧の『本溪日報』のように、この作品を連続分載した新聞もあるし、まわし読みはもちろんのこと、「手写本」まであらわれたというのだから、直接この小説を読んだひとも、全国的には随分の数にのぼるであろう。黒竜江のある林業局では、六七百名の青年が、昼夜にわたってまわし読みした。二月号の雑誌が、つぎつぎまわし読みされ、七月下旬になってやっととりもどしたという、湖南のある中学の定期購読者の例。雲南の青年労働者は、雑誌をかりるために、三十キロ近くの道を走って往復している。兎に角、小説がこんな大きな反響をよんだのは、はじめてのことだ、という有様なのだ。

そればかりでなく、友人から借りてきて、親子五人が食事しながら読みだしたが、箸をうごかすのも忘れ、涙ながらにききいった、という新疆の家族の例にみられるように、家庭で、あるいは職場で、食堂で、旅行の途中の車中で、船上で、朗読され物語られるのをきいたひとも多い。また、ラジオで、各地方の放送局が、連続番組で放送もしている。このように、原作や原作にちかいものを、耳からうけとった人たちが、おそらく文字によって読んだ人たちよりも、はるかに多数にのぼったであろう。

そのほか、中央人民放送局は、放送劇に改編している。上海映画製作廠では、映画の台本に改編している。河南の開封市労働者業余話劇隊や広東の深洲市粤劇団では、「話劇（新劇）」や「粤劇（広東の地方劇）」に改編して上演している。

北京からでている『連環画報』では、連環画（連続絵とき物語）にしている。

吉林の『延辺文学』、内蒙古の『花の原野』には、それぞれ朝鮮語訳、蒙古語訳がでている。（⑭の編者の「まえがき」による。同じく⑭の最後には、作者自身のべるところとして、その手許に、映画、話劇、歌劇に改編したもの、続篇の原稿など十数篇がよせられている、という。ただしこれは、原作流通の媒体とはなっていないであろう。）

ここまでみてきたところによっても、いかにさまざまな方法によって、作品が受容されているかがわかるとともに、いかに大きな反響がもたらされたかということもわかるはずだ。

いささかわき道にそれすぎたかもしれぬ。本題にもどしていくことにしよう。

「私はどうすればいいの？」について、まずあらわれた議論は、次のようなものであった。文中から察するに、①の筆者江励夫は、工場に勤めているひとらしい。

㈠陳国凱の作品は、読者の心からの歓迎をうけた。作品をよみ、ラジオできいた人たちが、街頭で、露路で、バスのなかで、理髪店で、事務室で話題にしたのは、この物語が本物なのか偽物なのか、作者はいったいどういう人なのか、ということであった。作者は、この短篇に、たしかに愛憎の情をこめており、その叙事的筆致、スケッチ風の手法、一人称のナレーションによって、読者に訴えかけ、林彪・「四人組」の「封建ファッショ暴政」を告発し、たたき、人びとの身心にきざまれた傷をあばいている。読者を感動させるものがあり、同情にとどまらず、義憤を激発せしめる。知識分子である子君と李麗文にしても、とくに劉亦民に典型化されている労働者の思想・行動も、真実性をもっている。いささか特殊ではあるが、「文革」中に多くの人たちの遭遇したことを、集中・概括したプロットはすぐれている。多くの読

者が、筆者に、この小説は本当にあったことで、虚構とは信じない、と語ったのは、ことに面白いことだ。

㈡なるほど「悲劇」ではある。しかし、生活から出発し、人民の利益から発しているもので、「尖鋭な社会問題」をあえて提出しているのである。「どうすればいいの」という難題をつきつけ、ひとに議論し考えさせるのは、この作品の構想のすぐれているところだ。だから、単に意気消沈して、「感傷」におちいらせる態の作品ではない。「傷痕文学」（「文革」のもたらした「傷痕」を主題にした文学をいう）を、「労働者・農民・兵士をかくこと」と乖離し対立するものとみるのは、偏頗にすぎる。

㈢最後に、多数の読者が、作者の続篇を期待しているのだが、薛子君、李麗文、劉亦民等は、大難にあいながらなお死には至らなかったのだから、傷をいやし、奮起して、「四つの近代化」実現のために身を投じ、為すところあるを望まれている。

これは、若干の留保をつけながらも、陳国凱の作品を肯定的に評価している。かなりの分量になるのをいとわず、わたしなりに論点の整理・要約をしたのは、ここにも、中国における文芸批評の典型をみることができるからである。

つまり、文学作品を、現実生活の延長線上において、本物か偽物かと真実性を問い、また、作品のなかに現実問題の解決をもとめる、それは文学のうけとり方の一般的傾向を示すものである。文学の源泉を生活にあるとし、労働者・農民・兵士をえがくべきだとする文学の対象と題材の問題は、ともに毛沢東の『文芸講話』に発するものだ。だから、そのスタンダードに知識人をくわえてもちだし、悲劇的作品を擁護しようとする、一定の配慮がうかがわれるわけである。さらには、現在の政策路線、「四つの近代化」に文学を奉仕させる発想、これも中国における文学の基本的なあり方にもとづくものだ。

こうした面は、①に並載された、②の咏華の批判にな

ると、それが否定的評価をくだすだけに、より鮮明にあらわれることになる。

②の論旨は、次のように整理できるであろう。かなり長くなるけれども、否定的見解の代表として、紹介しておきたい。

㈠筆者は、芸術手法からだけみれば、プロットは単調ではないし、筆致は清新であり、愛情の描写において「思想の解放」がみられ、感情は奔放、独自の風格をもつ新作であることを、一応認めてはいる。だが、そのプロットは、北京の街頭に、去年（一九七八年）の夏あらわれた「大字報（壁新聞）」の二番せんじである。そしてまた、四十年前（一九三七年のこと）にかかれた、著名な夏衍の話劇『上海の屋根の下』の、一女二男の「離合悲歓」にそっくりだ。生活を唯一の源泉とするだけでなく、遺産を継承し参考にすることは、もちろんかまわない。しかし、生活を源泉としつつ、高度の概括と集中をすることによって、生活次元より高めてこそ、典型的意義があるのだ。『上海の屋根の下』は、三十年代の半封建的、半植民地的旧中国の苦難の生活と革命青年の境遇に、芸術的加工をほどこしたから、典型であり、「真実の信ずべき」ものである。だが、陳国凱の作品が、おなじ題材とプロットによって、七十年代の悲劇をえがいたのは、典型意義と真実性を失っているといわざるをえない。

㈡社会主義の歴史的段階にも、暗い面はある。なぜなら、階級闘争は依然存在しており、真善美と偽悪醜は刻々闘争している。とくに、「四人組」が横行していた時期、われわれの党の民主生活は破壊され、人民の民主的権利は剝奪され、「冤獄」は国中にあまねく、悲劇は人を恐怖におとしいれるものであった。「四人組」粉砕後の今日、プロレタリアートの文芸工作は、この暗黒面をあばき、常軌を逸したこの歴史的時期の悲劇を反映しなければならぬ。それは、人民にこの血と涙の教訓を正視

させ、この悲劇を再演させないためである。過去一年あまり、そのような大胆な、成功した試みがすくなからずなされてきた。それらの作品は、「四人組」がつくりだした災難が、けっして個別の、偶然による現象ではないことを、訴えている。個人の不幸を表現していようとも、普遍的社会問題としての、時代の悲劇であり、階級の悲劇であり、社会の悲劇である。

しかし、「私はどうすればいいの？」は、全文七章のうち、七・八十％の文字は、それによって「四人組」の暴虐ぶりをあばくのではなく、主として、子君と前後二人の夫との感情の発展をなぞるところにおかれている。さらには、子君と麗文がわかれわかれに暮していなかったら、子君の家がオールド・ミスのおばさんだけでなかったら、線路上にひきずりおかれた麗文がたまたま労働者にみつけられなかったら、河から子君を救い出したのが昔の同級生でなかったら、隣組長がやさしい亦民のおばさんでなかったら、亦民が恋愛の辛酸をなめた独身者でなかったら、それに独立した家屋をもっていなかったら……もういい、このように、そのプロットは偶然的・個別的な現象にもとづいたものだ。作者の意図したものが、「四人組」の罪行がもたらした「傷痕」の暴露にあったにしても、その「傷痕」は「特殊な例外」にすぎない。

㈢同様に、この作品は、真実性を欠いている。それは細部の真実をいうのではなく、「社会の真実」「歴史の真実」をいう。文芸の任務は個有の方法で、正確に社会の現実を反映すること、つまり、生活の素材を精錬、集中化し、芸術典型化の方法によって、さまざまな社会現象の本質と歴史発展の基本趨勢を示すことである。華国鋒が「第五回全国人民代表大会の政府報告」でのべているように、「四人組」の「ファッショ独裁」の間にも、党員も幹部も人民も、沈黙していたわけではなかったし、闘争は一刻も停止されてはいなかった。天安門広場で爆発した偉大な「四五運動」は、まさにこの闘争の集中的

体現である。

このような観点からみるならば、ヒロイン薛子君は、政治的自覚をもたぬ、「文革」中の「逍遥旅」であり、なるほど、彼女のような人物が当時存在してはいたが、どうして彼女のごときを普通の人民の形象だと承認できようか。さらに遺憾なのは、子君の身投げの前後、ほとんど一人として好い人間にあわないことである。子君の家にはいりこんでいた男にしろ、設計班の責任者にしろ、病院の医者にしろ、隣組長の亦民のおばさんは別にして、みんな虚偽、偽善、冷酷無情、明哲保身の人物ばかりだ。小説の後半部で、唯一好い人物は劉亦民であるが、子君を救う前後の思想がどのようなものなのかは、ついぞ不明である。つまるところ、この作品は、「四人組」の暴威のもとでは、魂を売りわたした悪人が多く、原則を堅持した好い人間はすくなかった、と結論づけるものである。七十年代の中国の人民をまちうけたものが、一家離散から死への一筋道にすぎなかったというのなら、それは歴史に対する改竄であり、事実に対する歪曲でなくて何であろう。

マルクス・レーニン主義、毛沢東思想で頭脳を武装し、唯物史観によって正確に社会を観察・認識しさえすれば、芸術家はかならずや、党と人民の真実の姿を反映する、すぐれた作品を創作することができるであろう。

文中、「四五運動」とは、一九七七年四月五日におこったのでかく称するのだが、前稿でふれた「天安門事件」のことである。当時、この事件は「反革命」事件とされ、鄧小平が策謀したものとして、かれの失脚の直接原因となり、華国鋒の新首相実現をみたものだ。のち、一九七七年七月の中共第十期中央委員会第三回総会の決定によって、この事件は実は「四人組」の、鄧をおとしいれるための陰謀であったことになり、鄧は党副主席に復する。そしてそれは、周恩来にたいする大衆の敬愛のあらわれであったのであり、第二の「五、四運動」という

評価すらでてきた。

しかし問題はある。華国鋒自身、この「天安門事件」にかかわっても、かなり複雑な立場にあろう。それはそれとしても、文芸批評が時の政治指導者の言を引用して、作品判断の基準に利用する発想のありように、疑いをさしはさんでいないようにみられるところにこそ、問題がある。筆者咏華については詳かにしないが、その文章は、あきらかに政治権力による文芸裁断のあらわれではないか。そしてその背後には、「文革」批判というか、脱「文革」というか、そういう風潮に反感をいだく層が根強く存在している、ことのあらわれでもある。

実は、『作品』誌の出版されている広州において、このような議論がでてくるのには背景があった。咏華の一文の公表は六月号であるが、執筆の日付は四月二十一日になっており、そのほんのすこし前、四月十五日の『広州日報』に、黄安思の「前をむけ！文芸」という文章がでている（原文未見。『中国百科年鑑一九八〇年版』による）。

黄安思というひとは、広東省共産党委員会の宣伝部長だという（『思想の科学』一九八〇年九月号の懐冰「中国文芸の現況と展望」による）。彼は、「四人組」をあばき批判する小説を三種類にわける。一つは、大胆に「四人組」に反抗する英雄人物をえがいたもの。一つは、「四人組」の迫害下にうみだされた社会問題を提出したもの、もう一つは、「四人組」のほしいままな暴虐下にあって、個人がつきおとされた悲惨な境遇を訴えたもの。そして、反抗をえがいたものは、人を感憤させ、問題を提出したものは、人を沈思黙考せしめ、個人の不幸な境遇を訴えたものは、人を悲傷させることを免れがたい、として、この三種類の作品をことごとく「うしろむき」の文芸と称した。

この文章、実は一九七九年を新たな時期のはじまり（「新たな長征」とも呼ばれる）として、党が、一致団結して「四つの近代化」をすすめるために、「前をむけ」

と呼びかけ、文芸にも、そのスローガンを出したものとみられている。いまさらいうまでもなく、それは党の指導する政策路線への奉仕を、文芸に要請したものにほかならない。

しかしこれには、すぐさま反論があらわれた。文芸を簡単に「前むき」と「後むき」にわけるべきではない、そのような分類は不正確、非科学的だ。「百花斉放、百家争鳴」によって、文芸復興にむかいつつあるとき、またしても新たな「禁区（タブー）」をもうけることになる。文芸が「四つの近代化」に奉仕するのは当然としても、題材の多様化を制限し、「四つの近代化」をかく題材とその他の題材とを対立させるべきではない。といったものが、多数意見であったという。

この論争が、②の咏華の一文とかかわりをもち、事実また、陳国凱の小説をめぐる反響にかかわってきているのである。

ここでまた、『作品』誌上の論争へたちもどるが、一つひとつの論文について、くわしい要約をほどこすことはもうやめておく。肯定するにせよ、否定するにせよ、各論者の見解には、それぞれのニュアンスがあるけれども、それをもれなく紹介していくのはきりのないことだし、さほどの興味ももてないからである。さらに論争そのものが、重要性をもって展開され、相互に納得し首肯させる結論的なものをみちびきだすようには、発展していないということもある。だから、一定の整理をして、特徴的な点を列記するにとどめておきたい。

単純化していってしまえば、陳国凱の作品を否定するものは、基本的に「文革」派の立場に依然としてたっているもの、肯定的にみるものは、「文革」否定派ということになるだろう。

さきにとりあげた、②の「前をむけ！文芸」に呼応する咏華論文は、前者にあたるわけだ。そしてその後にでてくる、③と⑦は、咏華論文への批判的反論である。

③⑦ともに、真実性、典型性、プロットの偶然性への依存、悲劇の問題、批評態度にわたっており、咏華とは対立的見解をしめす。結局は、「文革」なり、「文革」の文芸におよぼした影響をどうみるかという立場から、わかれてくる意見であるが、題材、主題、形式、創作方法に「千篇一律」でない多様性をみとめ、文学作品に効用をもとめる考え方を、「狭隘な理解」としてしりぞけるところ、とくに③の、「わが国社会主義制度下のこの常軌を逸した時期が、なぜ十年ものながきにわたったのか。『四人組』はなぜ一時に勢力をうることができたのか。まさかわれわれが沈思黙考するに値しないというわけではあるまい」という指摘は、注目しておくべきであろう。

次に、④⑤⑧⑩は、基本的に咏華論文とおなじ立場にたつものといえる。

そのなかで、⑤の馮華徳論文は、陳国凱の小説を典型性をもたないときめつけ、「革命的リアリズムと革命的ロマンチシズムの結合」という、一九五八年の大躍進期に提起された創作方法をもち出しているところに特色がある。それは要するに、革命的リアリズムは、現実生活のなかの典型的事件を反映し、革命的リアリズムを基礎とする、革命的ロマンチシズムは、われわれの今日の現実から、明日の現実を表現することを求めるものだ、というのであり、前途に希望のないこの作品を否定するのである。

また、⑧の楊箭論文は、『梅江文芸』という他の雑誌からの転載で、陳国凱以外の作品にもふれるものであるが、要は、「文革」中の恋愛悲劇をえがくことによって、社会主義制度を攻撃しているのだ、という批難である。それは、中華人民共和国成立以来、文芸を政治に奉仕させるという文芸政策により、実質的に存在していた「禁区（タブー）」（その最たるものは、党と領袖、とくにその誤りにふれること。愛情描写、社会の暗黒面の暴露、社会主義制度の欠陥にたいする批判、従って悲劇をあらわに

すること等をふくむ）を栖にとっているものに他ならない。だから、現実のなかの党なり党員なりの積極的行為と信念をえがきださねば、「革命的リアリズム」とはいえない、ということになるし、生活の真実を反映する芸術的真実をえがきだすことにもならない、ということになる。そして、人民の団結、敵に打撃をあたえる戦闘性、労働者・農民・兵士の実践に学び、「偉大な時代」をたたえることが強調されることにもなるのである。

⑨⑪⑫⑬は、直接あるいは間接に、この楊箭論文を批判したものだ。

たとえば⑨の筆者任川は、楊箭の論を、レッテルはりで、棍棒を見舞うもの、文芸創作を討論するものではなく、陰険な恐ろしい起訴状である、と弾劾する。社会主義社会の悲劇をかくことが、社会主義制度を攻撃することだというのは、現実生活の矛盾をおおいかくし、無葛藤理論の観点から、悲劇創作を「禁区」とするものだ。「社会主義中国という大枠をはなれ、党とその周囲の人たちをすてて顧みず、『むつごとをかわす』のは、典型意義もなければ普遍性もない」と、愛情をえがくことにも反対するのは、またもや「禁区」解放の門をとざすものに他ならぬ、というのである。

つまりは楊箭への批判は、それを「文革」派の極左文芸思潮の典型的表現ととらえての批判であり、同時に、「四人組」の批判のために展開されている、例の「座談会紀要」（林彪同志が江青同志に委託して召集した部隊文芸工作座談会の「紀要」）批判の一環をなすものである。しかし、そのなかには、前稿でふれたように、毛沢東自身が手をいれた「紀要」を、毛沢東をたてながら批判しているという、自己矛盾もみられる(⑫)。

これまで、陳国凱の小説をめぐる論争のあらましをみてきたのだが、もうひとつ、⑥の中山大学の現代文学研究者集団による二回にわたった討論会の模様をみておこう。㈠当面の文芸創作についての評価、㈡頌歌と暴露の問題、㈢典型性と真実性の問題、にわけて整理されて

いるが、既述の内容と重複するものには、できるだけふれない。どの問題にも賛否両論があり、かたよりの生ずるのは、いたしかたないとして、興味あるところだけをとりあげる。

㈠文芸批評に、よくない傾向がある。「四人組」をばき批刊する作品が、あらたな「禁区」となって、批判しにくい空気がでてきていること。

「私はどうすればいいの？」を、「愛情の葛藤」「三角恋愛」をえがいた作品とする意見があるけれども、「怒りの時代」には「怒りの文学」がうまれる。林彪・「四人組」を批判する作品の出現は、作家たちの正義の怒りの必然的結果であって、積極的に擁護すべきである。絶対に、一九五七年の反右派闘争時（前稿でのべたように、その前年に「百花斉放、百家争鳴」の提唱があった）の、体制批判作家王蒙等を包囲攻撃した錯誤を犯してはならない。

㈡光明を頌歌することと、暗黒を暴露することとは、両論があるけれども、弁証法的に統一されるべきだ。「私はどうすればいいの？」という作品は、書ききっていない作品である。

㈢咏華論文にもでてきた、夏衍の『上海の屋根の下』では、革命家の主人公が監獄からでてくると、彼の妻はすでに彼の友人の一人と同居しており、彼らを幸福にしてやるために、主人公は毅然としてたち去る。

その他にも、許地山の『春桃』（一九三四年）も例にあげられている。この作品では、女主人公は、生活にせまられて男と同居するが、彼女は兵乱のなかで別れわかれになり、不具になった夫に再会する。彼女は、世間的通念を無視して二人の男と同居生活することにする（この要約は、⑥記載のものと異なる。わたしの読みとったものに改めた）。

ほかにもうひとつ、ソビエトの長篇小説『収獲』（映画化された）では、女主人公の前後二人の夫は、どちらも祖国防衛戦争で血を流したのであるが、はじめの夫が

突然もどってくると、あとの夫は家を出ていく。

以上例にひかれた三作品は、それぞれに作品のなかで解決を示しているのに、陳国凱の小説には解決がなく、読者に不快感をあたえる。

これに対して、李麗文と劉亦民との二人の英雄人物の形象そのものに、出路はあきらかに示されており、問題は解決されているのだ、という見解が優勢である。

また、「四人組」の生産や法制等についての破壊は、逐次回復しうめてゆけるが、精神の傷と肉体の消滅はうめあわせのしようがあるか。複雑な生活を、簡単に処理できないのは当然なので、誰にでも答えうるようなものは悲劇ですらない。

創作方法に関連しては、「私はどうすればいいの？」の如き小説を、「社会主義批判リアリズム」の作品だという、いままでにお目にかからなかった概念が提出されているのが、注目される。そしてそれは、社会主義リアリズムよりも強く、新しい文学流派を形成することもゆるさるべきものだ、といった意見があった。

「革命的リアリズムと革命的ロマンチシズムの結合」という創作方法が、内容にさまざまの理解をふくみ不明確なまま、創作方法の主流をしめているようだが、各種の方法の運用をみとめ、各種の文学流派をみとめるべきだ、とする多様化の主張がある。しかし一方では、「四つの近代化」の要求にこたえうる文学、という政策路線への追随をもとめる考え方もつよい。

これまでみてきた、評論家や研究者の意見にたいして、総括的な意味あいをもたせて、編者がまとめた、読者からの投稿や来信は、はなはだ簡明直截なものである。

「編者の按語」によれば、読者からの反響は、台湾省をのぞく全国二十九の省、市、自治区から、一千通あまりがよせられている。そのうち、七・八篇は批判的否定的意見、十数篇は、小説の構想、人物描写に検討をくわえている以外は、すべて陳国凱の小説を称賛し支持して

いる、という。圧倒的な支持ということになるだろう。反応をもたらした読者は、工場・砿山・商店の職員や労働者、農民、部隊の将兵、国の幹部、学校の教師・学生、下郷（農村にいっている）知識青年、文芸・医療・科学技術・政治法律関係の人たちである。

読者は、このような作品が発表されるようになったことを、「文芸の春の到来」とうけとり、「四人組」の罪行追究を文芸界にもちもとめ、永遠にこの恨みを記憶しておくために、人民に愛と恨みを教育するために、もっと多くの「私はどうすればいいの？」がかかれねばならない、まだまだ足りない、と訴えている。

そして、この作品の真実性を否認する意見にたいして、小説ではなくて、なまなましい事実のようだという素樸な感想から、各地における相似の実例が報告され、身近におこったこととひきくらべ、身につまされた読者たちは反論する。一・二の例を紹介しておく。遼寧の公安局（警察）につとめている人は、自分の体験を次のように報告している。私は「反革命」のレッテルをはられ、街をひきまわされた。若い妻はびっくりして、幼ない子供をつれて私と別れ、別の家庭をいとなむことになる。「四人組」が粉砕され、私の汚名はそそがれたけれども、かつての家庭をとりもどすすべはなかった、と。また、天津の中級人民法院民事法廷のひとからは、自分自身、数しれない李・劉のような人を処理したし、いまでも、子君のように、どう処置したらよいかわからない婚姻事件を受理している、といった報告もある。

こうした、現実におこりえた、あるいは起った事実とうけとる方向は、作中人物を、実在の人と信じ、慰めの言葉をかけ、子君はいまどこにどうしているのか、安否を知らせてくれといった依頼にまでつながってくる。

だから、咏華論文の批判には、多くの読者の反批判がでてくることになる。なぜ誌上にあのような文章をのせたのだ、前後に別の文章がなかったら、ひきちぎって返上したい、というものから、文芸批判なのか、政治審判

なのか、もし文芸法廷がひらかれるなら、自薦弁護人になろう、有名人におどかされるな、判定者は評論家や有名人ではなく、広汎な読者である、数年前には見慣れて珍らしいものではなかったが、かるがるしく作家の心血をそそいだ労作を抹殺すべきではない、といった反響が続出する。一方、この作品が掲載されてから、『作品』誌が停刊され「検査」されるという噂がたち、広汎な読者からの激励がよせられている、ということもある。

さらに積極的・建設的な意見として、このような作品を書いてくれた作者に感謝し、衷心を表現できない自分がうらめしいが、作者は私の代弁者になってくれた、年末にまた短篇小説のコンクールがあれば、私は一票を投ずる、といったもの、可能なかぎり客観的・具体的な作品の評価をしてもらいたい、という提言もでてくる。そして、最後に、作者の激励と助言への謝辞があって、一応しめくくられるのである。

一応といったのは、その後、翌月号に、作者陳国凱が「彼等はこのようにした！」という文章をかいて、自作への反響に結着をつけることになったからである。

作者は、そのなかでこういうことを書いている。

多くの読者からよせられた手紙には、作品の主人公たちへの同情と、続篇への期待があった。子君たちの住所を教えてくれ、文通をしたいという人たちもいた。チチハル市の商業学校の同志からは、「子君には未婚の従妹がいて、劉亦民にとつぎ、子君は李麗文と復縁し、子供はそれぞれがひきとった」という話が伝えられている、という便りがきた。

作者は、しかし、「小説中の人物はすべて虚構だ」と明言しながら、主人公たちが結局どうするのかという問題は、作中人物の性格の発展のもたらすところとして、劉亦民の性格描写のなかに暗示し、伏線をしいてある。したがって、「続篇」をかく必要はない、という。

とはいっても、多くの読者の希望もあり、咏華同志のように、また、「苦心惨胆して多くの偶然性に支配され

たプロットをしつらえ」「歴史への改竄、事実の歪曲」をしている、と責められるかも知れぬゆえ、物語の「真実」を保証する、一つの事実を紹介するのである。

それは、五月に『作品』編集部から転送されてきた、一読者の手紙にはじまる。この海南島海口市の中学の一女性教師の手紙は、「……私はもう何度も『私はどうすればいいの？』をよみました。あなたは林彪・「四人組」の迫害をうけたものの心の声を叫けばれた。子君の遭遇したことは多くのところで私と似ています……」というものであった。さらに二通目の手紙には、彼女の痛苦の体験がしるされていた。

「文革」前に、彼女は人民解放軍の幹部張士廉と結婚し、二人の子供をもうける。ところが、党員であった彼は、「文革」中林彪一味の罪行をあばいたために、軍事法院で無期徒刑に処せられ、部隊政治部の幹事から、夫はすでに死んだ、と遺品をわたされた。悲痛のあまり、二人の子供をつれて自殺しようとしたとき、青年労働者張泰安に救われ、一九六八年に結婚する。そして二人の子供をもうけ、夫は副工場長に昇任する。「四人組」が打倒されて二年後、彼女は最初の夫から手紙をもらい、はじめて死んではいなかったことを知る。一九七九年七月、張士廉は無実として原判決が破棄され、部隊にもどる。二人の夫のなかに立って、彼女の心は二つにひき裂かれる。が、張泰安は、毅然として愛する妻との離婚を決意し、法院に離婚の手続きをとる……。

彼女は、離婚手続の数日後、陳国凱に手紙をかき、苦しんでいる私たちに会いにきて下さい、旅費が都合できなければ、何とかしますから、ともかいてきたのである。

この話のなかにでてくる張士廉は、実は名前を一字変えてあるが、一九六六年三月二十九月の『人民日報』に、姚文元の「新編歴史劇『海瑞、官をやめる』を評す」を批判する文章をかいている、張志廉であることが明らかにされている。そして、第三信では、中央と『人民日報』

に直訴の手紙を出したことから、林彪・江青がみずから「指示」して、無残なリンチを加えたことも示されている。

第三信には、さらに、「海口市人民法院民事調定書」が添えられていて、咏華の「意見」のなかに、「たとい最も経験のある思想家、最もすぐれた法学博士でも、子君がどうすればいいのか、回答するすべはない、と断言してよい」とのべられていたのに対して、「辛辣な嘲笑」となっている、と逆襲している。

さらにつけ加えておくならば、張泰安は、いま、若い女性教師とあらためて結婚することになっており、彼女は張士廉と復縁、後半生を「四つの近代化」のために献身すべく、近く広州に転勤することになった。作者陳国凱は、まもなく「この生活のなかの『子君』に会えるだろう」、ことが、読者に告げられている。

「彼等はどうすればいいのか、という問題は解決したが、それは林彪・『四人組』が人びとの心にのこした巨大な傷が、たやすくぬぐいさられた、ということとは等しくない」、「この血債はなお徹底的に清算されてはいない」、というのが作者の考えていることなのだ。

一つのまとめとして

「文化大革命」とは何であったか。それは、中共指導者層内に、社会主義革命と社会主義建設の方式をめぐって意見の対立があり、「大躍進」の失敗のあとをうけた「調整期」に、党主流からはずされていた毛沢東が、毛沢東路線に批判的であった党幹部を、ブルジョア分子の代理人、党内実権派」とみなし、「資本主義の道を歩むもの」として、敵対的にたたこうとすることからはじまった。そこには、毛沢東の、社会主義社会にもなお階級闘争は存在する、だから継続革命を堅持しなければならぬ、という革命論に立って、路線のちがいがあるならば、人民内部の矛盾として処理さるべきものを、敵対的

な矛盾として処理しようとした誤りがあった。それが、ひとたび発動されると、何故にあのような度はずれの惨劇に拡大されていったのか。その究明は、中国でもなお端緒についたばかりであり、今後の課題でもあるだろう。

文芸面でみるならば、陳国凱の作品をめぐる論争のなかでも、「文革」を、「中華民族の歴史的大悲劇」とか、「中華民族の遭遇した空前の大災害」とか、「古今未曽有の災難と大災害」とか表現しているが、やったもの（加害者）も、やられたもの（被害者）も、ともにそのなかを生きたのであり、もたらされた死によってもはや償うことのできぬ人びとのためにも、不退転の決意をもって、その文学的表現をかちとらねばならぬだろう。

加害者が、みずから加害者であったことを自認することは、なみの苦しみではないはずだ。この論争のなかにもみられるように、「文革」を林彪・「四人組」の「ファッショ独裁」と攻撃しつつ、社会主義制度擁護の口実をもって免罪されようとする、そしてまた、いつまでも「四人組」への恨みにとどまっているのでなく、「四つの近代化」＝「新たな長征」のために献身しようと呼びかけることによって、すりかえてゆく傾向もあきらかにある。

被害者が、みずからうけた被害、「傷痕」をあくことなく追究する権利はある。いかに政策路線の要請があろうとも、その権利を放棄してはならぬだろう。陳国凱が、「この血債はなお徹底的に清算されてはいない」、と固執するのは当然すぎるほど当然だ。

が、すでにこの論争のなかでも、③の筆者秦家倫が、「わが国社会主義制度下のこの常規を逸した時期がなぜ十年ものながきにわたったのか。『四人組』はなぜ一時に勢力をうることができたのか。まさかわれわれが沈思黙考するに値しないというわけではあるまい」、という発言をしているように、「文革」そのものの渕源にむかうと同時に、その全期間にわたって基底に存在していた

真因があきらかにされるところまで、文学はつき進んでゆかなければならないだろう。

例えていうならば、魯迅の「狂人日記」がいま一度、かかれなければならないのではないか。「文革」の全期間にわたって、やったものがおり、やられたものがいたかぎり、一生苦しまねばならぬのは、逃れられぬ現実である。ならば、「狂人日記」の狂人のごとく、被害者・加害者の対立論理をこえて、民族の「慚愧」の自覚にたつことが必須のように思われる。

しかし、その道は容易ではない。

陳国凱の「私はどうすればいいの？」という作品は、一九七九年の全国優秀短篇小説コンクールに十八位（全二十五篇のうち）で入選した。読者大衆の投票数、二十五万七千八百八十五票のうち、何票を獲得したのかは、明らかにされてはいない。票数だけでなく、専門家の判断が加わるからである。けれども、推薦された二千篇のなかからえらばれているのだから、その人気と評価は大変なものである。

しかし、これを一個の文学作品としてみるならば、かなり甘い「メロドラマ」、中国流には「才子佳人」仕立ての小説であり、事実の衝激性をこえて、真の悲劇にまで昇華していないのは、上述のごとき、「文革」の悲劇の認識の深度に起因している、といわざるをえない。しかし、今後まだまだ、このような作品は、かきつがれるであろう。それほど、「文革」の傷はひろく深かったのである。

と同時に、次のような発言にも注意しておかねばならない。「現在党の工作の重点は、すでに社会主義的近代化建設にうつり、われわれの生活は変化し、われわれの人民は前進している。もし、われわれが新しい時期、新しい大衆と結びつき、新しい生活を理解し熟知していかなければ、われわれの創作は時代の需要に適応しがたくなる。」同主旨のものは論争のなかでも、しばしば顔をのぞかせていたものだが、これは、コンクールの表彰大

会席上での、作家巴金（中国文学芸術界聯合会副主席）の講話の一節である。「百花斉放、百家争鳴」は、またもや影をひそめるのではないか。それが杞憂でないことを願うのは、わたしひとりではあるまいと思うのだが。

〔補〕前稿で、この作家について、ほとんど知るところがないこと、「百花斉放、百家争鳴」の再提唱にのって輩出した「業余作家」のひとりらしいということを、かいた。その後、板谷俊生氏から、『広東中短篇小説集』第二集に、短篇小説一篇が収録されていることを教示していただいた。さらに、『全国新書目』によって、『羊城一夜』『代価』の二冊の短篇小説集があり、前者には、一九六二年からの創作十八篇がはいっているということを知った。ただ、両書とも未見であるが、すくなくとも「文革」以前から小説をかいていた人であることは、訂正しておきたい。（一九八〇年十一月）

〔追補〕一九八〇年十二月に中国をおとずれたとき、広州にもいったのであるが、陳国凱さんには会えなかった。中山大学の陸一帆教授の学生諸君にきいたところでは、陳国凱さんは広東窒素肥料工場に勤めている、とのことであった。（一九八一年一月）